
ポケスぺの世界へ

零戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケスぺの世界へ

【Nコード】

N7844X

【作者名】

零戦

【あらすじ】

大阪の普通の高校生やった俺——冬月将は目を覚ますと、ベッドの中にピカチュウがいた。

そしてそこはポケモンの世界やった。

これはゲームとポケスぺを織り交ぜています。

ゲーム三割、ポケスぺ七割といったところだと思います。

不定期更新です。

ヒロインはジムリーダー、四天王、フロンティアブレーンです。

第一話（前書き）

ポケスペとゲーム（リメイク版じゃない）をしていたらつい書いてしまった。

第一話

……何故か朝起きたら隣にピカチュウがいた。(核爆)

「どゆこと？」

とりあえず、起きる。

どうやら俺はベッドで寝てたみたいや。

あ、自己紹介が遅れたな。

俺は冬月将で、普通の大阪の高三や。

バイト終わって、メシ食って寝たはずなんやけどな……。

辺りを見渡すと、本棚を見つけた。

………本棚の本はほとんどがポケモンに関する本やな。

てことは……此処はポケモンの世界か？

ピカチュウがベッドで寝てるしな。

「シヨウ、ピカ。ご飯よ」

階段から母さんの声が聞こえる。

この世界の母さんは母さんやねんな。(意味分からん)

「…ピカ？」

母さんの声にベッドで寝てたピカチュウが目を覚ました。

「……ピカ？」

あ、俺見て唾然としとるな。雰囲気とかで分かるんやろな。

「……とりあえずメシ食べるか」

俺はピカチュウに言うと、ピカチュウは俺の頭に乗っかる。

俺は階段を降りる。

階段を降りると前の世界にもいた母さんがいた。

「おはよう。ご飯出来てるわよ」

「うん」

俺はご飯を食べる。

ピカチュウも用意されたご飯を食べはじめる。

「あら？将もこの世界に来たの？」

「ブウウッ!? Σ（。Д。）」

……まさか……。

「そゆこと。私も寝てたらこうなってたの。将より一週間も早くこの世界に来たのよ。理由は分からないけどね。まさか本当にポケモンの世界があるなんてね」

母さんが笑う。

「そーいや母さんはポケモンピンボールやクリスタルとかにかなりはまっていたな。」

「とりあえず、イシツブテとロコン、ポッポ、メリープ、マリルを捕まえたわ」

「早ッ!! Σ（。Д。）」

「てかマリルで滅多に出ないポケモンやで？」

「たまたまスリバチ山に行ったら出てきたのよ」

……あんた凄いわ……。

「てか、よう俺やて分かったな」

「私のはあんたの母親だよ」

……納得。

「あ、そういやウツギ博士が呼んでたよ」

「ふうん……てここワカバタウンッ!？」

「そうよ。ついでに言うとりメイクのソウルシルバーとかじゃなくて旧作の金銀・クリスタルみたいよ」

「旧作の金銀・クリスタルッ!？イヤッフーッ!!」

俺は思わず叫んだ。

だって旧作の金銀・クリスタルは俺にとっては青春やで。

小学生の時にようやったわ……。

それに正直最近のは特性とかあるからあんま好きちゃうからな。

ディグタのありじごくから逃げられへんてのどういう事やねん。

「てことは、俺が主人公？」

「主人公は私がこの世界に来た時に出発したわよ」

「んじゃ何で俺？」

「それはウツギ博士に聞きなさいよ」

……へえへえ。

とりあえずメシを食ってウツギ博士の研究所に行った。

——ウツギ研究所——

「いらっしやいショウ君」

研究所に入るとウツギ博士が出迎えてくれた。

「どないしたんですか？」

「実はね……………」

簡単に言うと、オーキド博士が新しくポケモン図鑑を持ってくれたから俺も図鑑を完成させてほしいらしい。

「ポケモンはピカチュウだけだと心細いと思うから残っているヒノアラシを君にあげるよ」

「はぁ……………」

てか図鑑あったんやな。

ウツギ博士によると主人公はヒノアラシ、強奪されたのはワニノコらしい。（俺がもらったヒノアラシはウツギ博士が腰を痛めた際、気分転換に外へ出たら草むらにおったらしい）

その後、研究員からモンスターボールとキズぐすりを貰って家に戻った。

……そういやモンスターボールでユーチューブのサイトで言ってたな。

人身販売やら窃盗やらどうやって大量生産してるのとか……。

——自宅——

「……という訳やねん」

「ふうん……まあ頑張りなさいよ」

……あっけらかんやなあ。

「ポケモンと旅が出来るのだからいいじゃないの」

まあそらそうやけどな。

「お金は貯金しといてあげるからね」

へえへえ。

「んじゃま行ってくるわ」

「行っつてらっしゃい。ポケギアは持ってるんやからたまに電話しなさいよ。後、伝説ポケモン捕まえたら私にも見せてね。必ずよ」

「はいよ」

俺は準備をして母さんと別れの挨拶を交わして家を出た。

とりあえず、俺のママチャリの前カゴにピカとヒノアラシを乗せて出発した。

目指すはヨシノシティやな。

第一話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第二話（前書き）

この作品はポケスペの金銀・クリスタルから始めています。

第二話

「ようやくヨシノシティに着いたな……」

俺達は三時間かけてヨシノシティに着いた。

三時間もかかったんは、ワカバタウンとヨシノシティの間にある29番道路でピカチュウとヒノアラシのレベル上げをしていたんな。

今のレベルはピカチュウレベル12、ヒノアラシレベル12に上げている。

「とりあえずポケモンセンターで休息するか」

二匹をボールに戻してジョーイさんに預ける。

「ふう」

俺はポカリを買って一息いれる。

「……何で29番道路にイトマルやゴローンとかおんのや？」

俺はそう呟いた。

29番道路にはポツポ、オタチ、コラツタ、夜にはホーホーが出るはずなのに、イトマルやゴローン、イワーク、プリンとかもいてんな。

「……まさか、金魚クリスタルやけどポケスペか？」

ポケスペは草むらに入ったら色んなポケモン出てくるからな。

「……まさかな……」

あの漫画は面白いけどな。アニメ化はしてほしい作品やし。

「まあ、ポケスペでも俺は関わらんとこかな」

そこら辺は主人公達に任すわ。

「ショウさくん。回復は終了しましたよ」

ジョーイさんが言うてくる。

「あざーす」

俺は二匹を受けとってポケモンセンターを出た。

「さて、時間は昼の1時か。メシはさっきお握り食べたし、このままキキョウシティに行くか」

二匹もボールの中で頷いた。

「キズぐすり買って30、31番道路に行くか」

俺はチャリに乗ってヨシノシティを出た。

——31番道路——

「ヒノアラシ”ひのこ”やッ!」

ヒノアラシのひのこがむしとり少年のキャタピーに直撃してキャタピーが倒れた。

「僕の負けだ。はい、賞金の500円だよ」

「まいど」

俺はむしとり少年から500円を受け取る。

「もう夜やな。キキョウシティにちゃっちゃと行くか」

ポケギアで時刻を見ると、夜7時を指していた。

俺はゲートを通してキキョウシティのポケモンセンターに入った。

「お願いしまゝす」

「はい」

俺は四つのボールをジョーイさんに渡す。

ん？増えてないかやて？

あれからバタフリー、ピジョンを捕まえてんな。

「ん？」

ソファアに座っていると、ポケモン雑誌を見つけた。

「……………ん？」

十一歳でポケモンリーグチャンピオンになったマサラタウン出身のレッドの写真があった。

……………ポケスぺのレッドやった。

「……………ポケスぺかあゝ」

俺はソファアに寝転がる。

まあエリカやナツメ、カンナおるからええけどな。

三人好きやからなあ。多分エリカファンの奴は絶対に多いな。

「ショウさん、終わりましたよ」

「はいはい」

俺はボールを受け取る。

「さて、マダツボミの塔でゴース捕まえてから寝るか」

俺達はマダツボミの塔に向かった。

——マダツボミの塔内——

何故か所々、壊れているところがあったけどゴールドとシルバールの仕業やな。

「ん？」

……何故か、マダツボミの塔はゴースが出るはずなのにゲンガーが出た。

「まあええや、ポケスぺの世界やしな。ピカチュウ、”でんじは”ッ！！」

ピカチュウが”でんじは”でゲンガーの動きを麻痺させる。

”電気ショック”やッ！！」

そして”電気ショック”でゲンガーの体力を減らす。

「今やッ！！」

俺はモンスターボールをゲンガーに向けて投げた。

ボムンッ!!

「よし、捕まえたな」

無抵抗しなくなったボールを拾い上げる。

「さて、後は秘伝マシンのフラッシュを貰うだけやな」

「相手はマダツボミだけやからヒノアラシとピジョンで充分やからな」

「ぬう、俺の負けじゃ。約束通り秘伝マシンのフラッシュをあげよう」

まあ余裕でマダツボミを倒した。

そして、あなぬけのヒモを使ってマダツボミの塔を脱出した。

時刻は夜の9時か……。

「ポケモンセンターに泊まるか」

俺はチャリでポケモンセンターに向かって、皆と一緒に遅めの晩飯を食べる。（豚生姜定食）

ちなみに、ポケモンセンターではトレーナーのために寝食はタダらしい。

「ふう、食った食った。風呂に入って寝るか」

俺達は風呂に入って着替えて布団に潜り込んだ。

明日はジム戦やな……。

第二話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第三話（前書き）

タイトル変えました。

バトルはゲームと同じにしています。

第三話

「オーキド博士。ヒノアラシと図鑑は新しいトレーナーに渡しました」

「ほう。そうかね」

ワカバタウンのウツギ研究所で、オーキド博士とウツギ博士がお茶をしていた。

「博士は今からコガネシティですか？」

「そうなんじゃよ。クルミ君のポケモン講座に出なくてはな」

オーキドはそう言って緑茶を飲む。

「ところで、その図鑑とヒノアラシをその四人目に渡してよかったのかね？」

オーキドはウツギに尋ねる。

「はい。彼はゴールド君と同じ、此処ワカバで育って顔見知りです。まあゴールド君は彼の事は知らないと思いますけどね」

ウツギはそう言って苦笑した。

「まあウツギ君を信じるよ。で、もう一度聞くんが、ヒノアラシは本当に野生でいたのかね？」

「はい。ワニノコの強奪事件から翌日、外の空気を吸おうと頑張って腰の痛みに耐えながら外に出たら草むらにいたんですよ」

「ふむう……」

オーキドは腕を組んで考える。

「……やはりポケモンの生息地をもう一度調べる必要があるようじやな」

「そうですね」

ワカバタウンではこのような事が話し合われていた。

——キキョウジム——

「さあて、行くか」

俺はジムに入った。

「君が挑戦者か」

「ああ、まあよろしく頼むわ」

俺はピカチュウを出す。

「頼むぞポップ」

そしてバトルが始まった。

「ピカチュウ、”でんじは”やッ!!」

でんじはでポップの動きを鈍らせる。

「そのまま”電気ショック”ッ!!」

直撃を受けたポップは倒れた。

「中々やるようだな。いけッ!!ピジョンッ!!」

ハヤトがピジョンを出す。

「ピカチュウ、もう一回”でんじは”ッ!!」

でんじはでピジョンの動きが鈍くなる。

「く、ピジョン”どろかけ”だッ!!」

ゲ。

どろかけの効果で命中率が落ちたか……。

「ピカチュウ、”電気ショック”ッ！！」

けど外れた。

「ピジョン”どろかけ”ッ！！」

どろかけでまた命中率が下がる。

体力もあまり無いな。

「もう一回”電気ショック”ッ！！」

今度は当たって、ピジョンを倒した。

「フ、見事だった。ウィングバッジと技マシン31をあげるよ」

「おう、ありがとうな」

俺は二つを貰って、ピカチュウをポケモンセンターで回復させてからヒワダタウンに向かった。

「ちょっと此処で一息やな」

32番道路のポケモンセンターで傷ついたピカチュウ達を回復させる。

「もう二十匹くらい捕まえたな……」

ヌオーやウパーとかおったからな。

てかセンター前にヤドンのしっぽを売っとるオッサンがおったけど思いつきし無視したった（笑）

時刻は昼の3時か……。

「チャリで進んだら夜にはヒワダタウンに着くな」

回復したピカチュウ達を受けとって、俺はつながりの洞窟に入っ
た。

——ヒワダタウン——

「着いたな。時間は7時か。まだジム戦はやれるな」

センターで回復させてヒワダジムに乗り込んだ。

「学会で留守やて？」

「そうなんだ。代わりにツクシさんの手持ちポケモンがいるからそれを全部倒したらバッチをあげる」

ジムにいたむしとり少年からの説明を聞く。

そして10分で全部を倒した。

まあ相手はトランセルやコクーンやったからな。

ピジョンとマグマラシ（ヒノアラシから進化している）でボッコボコ。

こらそこ。ズルとか言うな。

「ま、これでインセクトバッジは手に入れたしな」

そのままの勢いでウバメの森へ突入。

予想通りにスミ職人がおったから秘伝マシンのいあいぎりを手に入れた。

マグマラシにいいいぎりを覚えさせて先へ進めるルートを作って、34番道路に向かった。

「じゃあ電話番号を交換しようよ」

34番道路でたまたまバトルをしたピクニックガールのミズホに言われた。

「ああええよ。ほら、これが俺の番号や」

「ありがとうねショウ君」

……女の子の番号は前世でもあまりくれなかったからなあ。

何か嬉しいな。

「じゃあ何か面白いの見つけたら連絡するね」

「おう」

俺とミズホは分かれて、コガネシティに入った。

第三話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第四話（前書き）

捏造です。

リニアは試験で走っています。

そしてエリカフラグ。

アンズは分からない……。。

第四話

「もう8時か……」

ピクニックガールのミズホと分かれたのはええんやけど、警察官のトレーナーとバトルしてたからなあ。

「コガネシティは大阪やな……」

まあモチーフはそうやと思うねんけどな……。

「ん？」

ビルとビルをジャンプしている忍者を見つけた。

「……バレバレやねんけど……」

俺は思わず忍者を追い掛けた。

「父上、今日の仕事も無事終わりました……」

忍者は夜空を見る。

「父上……何処にいるのですか……」

「父上って、キョウの事か？」

「ッ!？」

忍者が振り向くと青年がいた。

「カントー地方のセキクシティの新ジムリーダーのアンズやな？」

俺は彼女に問い掛けた。

「………貴様、何者だ……」

アンズがボール型手裏剣を構える。

「俺の言葉を見捨てるのは肯定としておくわ。ところで、キョウの行方を知りたいんか？」

「ッ!？ち、父上の居場所を知っているのかッ!!」

アンズが俺の両肩に手を据えて揺らす。

「あ、あくまで憶測やから揺らすな」

「す、済まぬ」

あゝビックリした。

「まああくまで憶測なんやけど、キョウはカントー四天王のシバと一緒に修行してんねん」

「修行……ですか？」

「ああ、グリーンを倒したい一心でな」

まああながち間違っではないからな。

「……そうですか。父上は生きているのですね……」

アズが静かに泣き出した。

「お、おい」

「す、すみません。ホツとしたらつい……。貴方は？」

「俺？俺はワカバタウンのショウや。今年で18歳になるな」

「ショウさん。情報をありがとうございます」

「いやええよ。たまたま君と会っただけやしな」

「その情報は誰から頂いたんですか？」

ウゲ……。

「……風の噂でやつやな」

「はぁ……………」

とりあえずそれで納得してな。

「ですが、シヨウさん。ありがとうございました。また頑張れそうです」

「おう、しっかりな」

「セキチクに来たら是非ジム戦を……」

「ああ、着いたら即座に行くわ」

「フフ。では」

アンズは俺の言葉に笑ってコガネの中に消えていった。

「まあ、キヨウの生存情報を教えても歴史は変わらんやろ」

案外、ポケモンリーグでハヤトに勝ちそうやけどな。

「さて、センターに帰って寝てジム戦に行くか」

俺はセンターに帰った。

——翌日——

「あ、ラジオカード貰いに行こ」

ポケギアにいれなあかんしな。

俺はラジオ塔に向かった。

——ラジオ塔——

受付嬢からラジオカードを貰った。

ちなみにクルミちゃんとかは特番放送のために大半のスタッフとかと一緒にロケに行っているらしい。

ポケスペやから多分、ゴールド関連やろな。

「……………そうですか……………」

「……………ん？」

出ようとした時、階段から何故かタマムシジムリーダーのエリカとヤマブキジムリーダーのナツメが降りてきた。

……………何でやねん……………。

知らんぷりしとくか……。

「……あら？ その貴方はカントーのトレーナーですか？」

ギクギク（。〇。；；

「い、いや。昔にカントーに住んでたんや」

「そうですか。頭にピカチュウを乗せていたので、てっきり……」

エリカが俺に話し掛ける。

「まるでレッドとピカみたいすわ」

「はぁ………」

「………」

俺は相槌をするが、ナツメが俺を見ってくる。

「あの……何か？」

「……お前はトレーナーか？」

「あ、はい。キキョウとヒワダのジムバッジを持っているけど……」

「あら、ならいつか私達のところにも来るのかしらね」

「そこまで行けたらいいですけどね」

ぶっちゃけグリーンが強すぎるしな。

「…………お前は中々のあれだな…………」

「え？」

「いや、何でもない」

ナツメが何か言っていたような気がするけどなあ。

「エリカ。私はそろそろシロガネ山に戻らせてもらおう。なにせ、私は療養中の身だからな」

「はい、分かりましたわ」

ナツメはそう言って消えた。

やっぱり超能力やなあれ。

「そういえばまだ貴方の名前を伺っていませんでしたわね」

「ワカバタウンのショウや。歳は18になるわ」

「あら？ 私と同じ年齢ですわね」

…………その歳でタمامシ大学を教えているんかい。

「なら敬語ではなくてよろしいですわ。普通に接して下さい」

「それなら遠慮なくそうさせてもらおうわ」

「はい」

俺の言葉にエリカは微笑んだ。……意外に可愛いな。

「これからジムですか？」

「ああそうやけど……」

「なら、見学させてもよろしいですか？まだタマムシ帰る時間はまだありますので」

……あれ？俺、何かエリカにフラグ立てたっけ？

第四話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第五話（前書き）

まず一言………何故こうなった？

第五話

私も見に行っていていいかと聞いた時のショウさんの表情は面白いですわね。

あらあら、自己紹介が遅くなりましたわね。

私はタمامシシティの名家の一人娘にしてジムリーダーのエリカですわ。

……何か説明というより自慢になっていますが気にしないで下さい。

ラジオの収録という事で遙々とジョウトにナツメとやってきました。

でも、ラジオ塔で中々面白い人とお会いになりました。

まるでレッドみたいですわ。

歳が同じ年だという事から話しがつい弾んでしまいましたが、ショウさんはジム戦をするらしいので私も見に行きますわ。

リニアでカントーに帰る時間はまだありますし。

「え？ジムリーダーがおらんやて？」

「そうなの。コガネラジオの特番でアカネちゃんも行っているのよ」

ジムトレーナーの大人のお姉さんが説明してくる。

「一応、ジムリーダーがいない場合は私達が相手をする事になっているんだけど……」

「ならそうさせてもらおうわ」

俺達はバトルを始めた。

「ハッハッハ。レギュラーバッジはゲットやな」

「そうですわね」

俺とエリカはコガネジムを出る。

「でも、少しズルではありませんでしたか？ノーマルタイプにゴーストタイプを出すなんて……」

「そう言われてもなあ。バトルに卑怯やズルはないけどな」

俺は終始、バトルではゲンガーを出していた。

エリカはそれが気に入らんみたいやな。

「バッジを守っているなら苦手なタイプでも勝たへんとな」

「……そうですわね……」

エリカが少し落ち込んでいる表情をする。

「ちょっと着いてこいや」

「え？」

俺はエリカの手を取ってコガネ百貨店に向かった。

「ほら、食えや」

俺はソフトクリームをエリカに渡す。

「これは……」

「ん？ソフトクリームやで」

「それくらい知っていますわ。何で私に……」

「落ち込んでるより俺は一生懸命ソフトクリームを食べてる表情が好きやけどな」

………ちよつとキザやったな。

「……フフ。そうですわね」

エリカは苦笑してソフトクリームを食べはじめる。

お、俺のも溶けそうやな。食べよ。

「ん？あらあら、ショウさん。アイスが頬に付いてますわよ」

「お、スマン」

エリカが俺の右頬に付いたアイスを取る。

………てか……。

「……エリカもアイスが頬に付いてんで」

「えッ!？」

エリカが驚く。

「ちよつと待てよ……ほら」

俺はエリカの左頬に付いたアイスを取って舐める。

「あ……………」

「ん？どないしたんや？」

エリカが顔を真っ赤にしている。

「その……付いてたのを舐めたんで……」

……………そういやそうやった……今の俺の顔はスゲー真っ赤やろな……………。

「わ、悪い……………」

「い、いえ……………」

ちょっと気まずい雰囲気になりながらソフトクリームを食べる。

ピリリ、ピリリ。

その時、ポケギアが鳴った。

「あ、そろそろ時間ですわ」

「そうか。なら駅まで送るわ」

俺達はコガネ百貨店を出て、リニア駅に向かう。

「ショウさん、僅かな時間でしたが楽しかったです」

「いんや。俺も楽しかったわ」

「タママシに来た時は是非ジム戦を……………」

「俺、フルボッコになりそうやけどな……………」

「そうならないように祈ってて下さい」

「祈るんかいッ!!」

「フフ……………」

俺のツツコミにエリカが笑う。

『ヤマブキシティ行きリニア、間もなく発車しまあす』

駅員がスピーカーを使って知らせてくる。

「んじゃあな」

「はい、ではまた……………」

エリカは俺に手を振り、俺もエリカに手を振る。

「あ、そうや。これあげるわ」

俺はピカチュウのストラップをエリカに渡す。

「…………ありがとうございます」

エリカが俺に微笑んだ。

…………スゲー可愛いです。

プシュー。

リニアはゆつくりと出発した。

リニアはあっという間に俺の視界から消えた。

「…………さて行くか…………」

俺は駅を出た。

「…………青春だなあ…………」

駅員がボソツと呟いた。

次はエンジュシティやな。

第五話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第六話（前書き）

アカネフラグが立ったかも……何でこうなった？

第六話

『ヤマブキくヤマブキく。お忘れ物が無いよう御注意下さい』

アナウンスの言葉と共に私はヤマブキのリニア駅に降りる。

「ふう……………」

私はポケギアに付いたピカチュウのストラップを見た。

シヨウさんに渡され、初めて男性からプレゼントされた物……………。

「見返りは私の電話番号ですけどね」

ピカチュウのストラップを貰った時、私の電話番号が書いた紙をこっそりとシヨウさんのポケットに入れましたわ。

「フフ……。ビックリするでしょうね」

私は思わず笑ってしまう。

「さて、タマムシに帰りましょうか」

私はヤマブキシティ駅の改札口を出ましたわ。

——コガネジム——

「うわあああーんッ！！負けてもうたあああーんッ！！！」

コガネジムに大音量の泣き声が響く。

「ゴメンね。アカネがああなるとしばらく泣き止まないの」

俺の近くにいたミニスカートのアスカが説明してくる。

さて、何故レギュラーバッジを手に入れたはずなのに俺はジム戦をしている理由はただ単にアカネがジム戦をしたいとの事や。

「ウチが負けたみたいやんかッ！！」

そう言ってきたので、ジム戦になったわけや。

まあ結果的に俺が勝ったんやけど、ミルタンクはマジヤバかった。

金銀クリスタルのミルタンクのメロメロ↓ころがる↓メロメロ↓ころがるのパターンでトラウマ並やからな。

てかコイツ、骨折してんのに上手く泣けるな。

「うわあああーんッ！！！」

相変わらず泣いてる………何かイラついてきたな。

「アスカさん。すみませんがこの泣き虫、少し借りるで？」

「え？ いいわよ」

案外簡単に了承が来たな。まあええや。

「ほらこいアカネ」

「な、何すんねんッ!!」

「じゃあかましいわッ!! 来いったら来いやッ!!」

俺は思わず怒鳴るがええや。

アカネの泣き顔は意外と可愛いと思うな。

「ほらよ」

俺はアカネにクレープを渡す。

「……ありがとな」

「お前が泣き止まんからこうなったんやろが……」

「何やてッ!!」

「事実やろが……………」

「グ……………」

アカネは俺の言葉に言い返されなかったんか、クレープを食べだす。

「お、意外と美味いやんこのクレープ」

「クレープ屋に謝ってこい」

俺はアカネにツツコミを入れる。

「…………あんた、意外とおもろいな」

「阿呆ぬかせや。俺は何時でもおもろいわ」

俺はピカチュウにアイスを渡す。

ピカチュウは嬉しそうにアイスを舐めている。

「…………ゴメンな。ウチが泣いたせいで、あんたに迷惑かけてもうた……………」

「んなもん気にすんな。悔しかったら泣くのは普通や」

「…………ありがとな……………」

…………あれ？フラグやろか……。

「んじゃあウチはジムに戻るわ」

「もうええんか？」

「クレープ奢って貰ったしな。あ、後一個買ってええか？」

「……………太るで」

「アカネチョップッ!!」

ビシッ!!

「アダッ!？」

アカネにチョップされてた。痛いな。

「女の子にそんな言うなッ!!」

「女の子？男やろ？」

「アカネチョップッ!!」

「やから痛いって言うてるやろッ!!」

「あんたがいらん事言うからやろッ!!」

煩いな。事実やろが……。

「はい、クレープ」

「……ありがと……」

俺は新しいクレープをアカネにあげた。

「今度こそジムに帰るわ」

「ああ。またジム戦しよな」

「……次は負けへんからな……」

アカネはそう言ってコガネ百貨店を後にした。

「……俺も行くか……」

俺もコガネ百貨店を出て、チャリに乗って35番道路に向かう。

「ポケギアで音楽聞きながら行くか」

俺はポケギアの音楽をつける。

「……そういや、エリカからいつの間にか電話番号貰ったな……」

ストラップのお返しやろか……。

「まあええや。登録しとこ」

俺はエリカの番号を登録してラジオをつけた。

『臨時ニュースをお送りします。繰り返します臨時ニュースをお送りします。本日正午、エンジュシティでマグニチュード8クラスの地震が発生しましたッ！！また、原因不明の大規模な地盤沈下が発生した模様です。現在、住民の避難が始まっています。くれぐれも被害区域へは近づかないようして下さい』

物語は急速に速まった。

第六話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第七話（前書き）

エンジュ震災です。

第七話

「……………此処がエンジュシティやな……………」

瓦礫の山と化しているエンジュシティを見て眩く。

チャリでエンジュシティまで来たけど、こんな荒れ具合やとチャリがパンクしそうやからピジョンに背中にあるリュックを掴んで飛行させてきた。

「ありがとなピジョン」

俺はピジョンを戻す。

「……………多分、まだ生存者はいるかもな。バタフリーツ!!」

今度はバタフリーを出す。

「バタフリー、”ねんりき”で瓦礫や木材を退けるんやツ!!」

「フリーツ!!」

バタフリーが”ねんりき”で瓦礫や木材を退かしていく。

「ん?」

瓦礫の中にシャワーズが挟まっていた。

「バタフリーッ！！シャワーズを挟んでいる瓦礫を退けろッ！！」

「フリーッ！！」

バタフリーが”ねんりき”でシャワーズを挟んでいる瓦礫を退かせる。

「大丈夫か？」

俺はリュックから傷薬を出してシャワーズの体力を回復させる。

体力を回復したシャワーズは尻尾を振ってくる。

「後でポケモンセンターで回復させてやるからそれまでボールの中に入っときな」

シャワーズは俺の言葉に頷いて、俺はモンスターボールを投げる。

シャワーズは一応ゲットした。

「さて、人命救助しよか」

俺達はそれから日没になるまで男性三名、女性四名、ポップオ二匹、コラッタ三匹を救助した。

——臨時診療所——

「救助の協力ありがとう。君のおかげだ」

「いえいえ。当然の事をしたまです」

あ、シャワーズを回復させな。

「すみません、ポケモンセンターは何処ですか？ポケモンを回復させたいので」

「ああ、ポケモンセンターならあそこだ。全壊はしているが非常電源は付いているから回復は出来るはずだ」

「ありがとうございます」

俺は礼を言ってポケモンセンターに向かった。

途中、ゴールドとシルバーが戦っていたけど無視をしてピカチュウ達のポケモンを回復させる。

チャンチャンチャチャチャーンッ！！

ゲームと同じ音かよ……。

「ま、ええや」

俺はシャワーズを出した。

「さ、これでお前の体力は回復したで。自由に生きや」

俺はそう言ったけど、シャワーズは首を左右に振って俺の膝にスリスリする。

「……俺と一緒にいきたいんか？」

俺の問い掛けにシャワーズが頷く。

……………まあええか。

「んならよろしくなシャワーズ」

シャワーズは俺の言葉に嬉しそうに頷いた。

これでピカチュウ、マグマラシ、ピジョン、バタフリー、ゲンガ
ー、シャワーズで六匹揃ったな。

ピリリ、ピリリッ!!

ん？母さんから電話やな。

「はい、もしもし？」

『あ、ショウ？頑張ってるか？』

「ああ。今、バッジは三個や」

『そっか。アタシもハヤトに挑んで勝ったわ』

「勝てたん？」

母さん凄いな。

『当たり前よ。それで、シヨウ。あんた、バトルする時、ワカバタウンのゝとか言ってる？』

「ジムリーダー戦の時は言ってるで」

『それがなあ……今住んでるんはワカバタウンやけど、五年前はマサラタウンみたいやねん。たまたま役所に行く用事があったから役所に行って確認したら五年前の私達はマサラタウンに住んでたみたいよ』

「そうなん？」

『ええ。だからこれから自己紹介する時はどっちなにしなさいよ。まあワカバタウンでええけどね』

「どっちやねん」

思わず母さんにツツコミを入れた。

『まあ用事はそれだけよ。頑張りなさいよ』

「ああ、任しとけや」

そう言って電話を切る。

……ふうん。マサラタウンねえ。

てことはレッドとかは俺を知っている可能性があるな。

「ま、万が一やろな」

とりあえず、今日はもう寝ようか。

俺は避難民用のテントに戻って一夜を過ごした。

それから三日間、エンジュシティに留まって被災者の支援したりして次のアサギシティを目指した。

第七話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第八話（前書き）

そろそろポケスぺ組と合流します。

第八話

「……はあ、暑いなあ（；´Д´）」

俺はアサギシティに近い40番水道の海岸で海水浴をしていた。

たまに海岸にいるトレーナーに勝負を挑まれるけど、ピカチュウを鍛える恰好の餌食やな。

だってトレーナーはかいぱん野郎かビキニのお姉さんしかいなかった。

ビキニのお姉さんでもたまにオッパイ大きい子いたけどごっちゃんですm（　）m

「ま、母さんから頼まれたサニーゴとチョンチーは捕まえたし、後で渡しに行くか」

アサギシティに着く前日に、母さんから再び電話があって「アサギシティに行ったらサニーゴとチョンチーを捕まえて」と頼まれたんやな。

んで二匹を捕まえたのはええんやけど、転送システムがまだ回復してないからピジョットで送るしか方法はなかった。

あ、ちなみにポケモンも進化しているのといで。

バクフーンレベル42、ピカチュウレベル45、バタフリーレベル41、ピジョットレベル41、ゲンガーレベル43、シャワーズレベル42になっている。

ピリリッピリリッ！！

「ん？」

ポケギアが鳴っているな。

「……非通知？誰やろ……」

エリカとアカネとは番号交換しているけど……。

「はい、もしもし？」

俺は電話に出た。

『おうシヨウ君かね？』

何かおっちゃんの声やな。

「確かに自分はシヨウですが？」

『そうか。ワシはオーキドじゃ』

……マジ？

「…………そのオーキド博士がただのトレーナーの自分に何かようでするか？」

『いやいや。君はポケモン図鑑を持っておるじゃろ？ポケモン図鑑はワシが選んだ人間のみしか渡されない図鑑なんじゃ』

「はあ、ですが自分はウツギ博士から貰いましたけど？」

『ああ、その一機は試作なんじゃよ。一応、他の三人にも図鑑はあるんじゃが念のためとウツギ君が判断したんじゃよ』

成る程なあ。

『それで今回、君の電話したのはアサギシティで二人の図鑑所有者と会ってほしいのじゃ』

「二人の図鑑所有者ですか？」

『うむ。一人はカントーの図鑑所有者なんじゃが…………ちよつと危なつかしくてのう』

イエローの事やな。

『君は二人を支えてくれまいか？』

「はあ、分かりました。アサギシティにおればいいんですね？」

『スマンのう。プロフィールとかはこっちから送るのでな』

「分かりました」

俺はオーキド博士との電話を切る。

ピリリッピリリッ！！

あ、来たな。

「……やっぱイエローとクリスタルか……」

多分、このまま行くとシルバー達にも会いそうやな。

「まあええや」

俺は海水浴を切り上げて、アサギシティに向かった。

アサギシティのポケモンセンターの前でイエローがベロリンガに襲われてるけど事なきを得たな。

あ、バタフリーで飛んだな。

「て、俺も合流しないとな。ピジョット」

俺はピジョットを出して”そらをとぶ”をさせる。

二人を追い掛けると、一隻の漁船が現れた。

二人は漁船に着陸した。

「俺を忘れては困るんやけど……」

「よかったなイエロー。お目当ての彼女に会えて」

「ハイッ!!」

「イエ……ロー？」

「何だ、まだ自己紹介も済んでねえのか。ゴメンよお嬢ちゃん」

舵を握っている釣り人のヤスヒロが申し訳なさそうに言う。

「イエローってのはそう、こいつの名前。実はこう見えても一年前、カントーでの大騒動を解決したトレーナーの一人だ。知ってるだろ？ 『四天王事件』」

「よろしく」

麦藁帽子を被るイエローがクリスタルに挨拶をする。

「俺を忘れては困るんやけど……」

その時、頭上からピジョットに乗った一人の青年が降りてきた。

「あの……貴方は？」

クリスタルがおずおずと青年に聞いた。

「俺はシヨウ。ジヨウト四人目の凶鑑所有者や」

俺はクリスタルにそう答えた。

第八話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第九話（前書き）

原作通り。

第九話

「ジョウト……四人目の図鑑所有者？」

「そうやで」

クリスタルの問い掛けに俺は答える。

「オーキド博士からアサギシティにおつといてと、電話が来てな。待ってたんやけど俺を置いていこうとしてたから追い掛けてきたんや」

「あ……………」

……イエロー、忘れてたなお前。

「ま、まあこれで揃ったな。じゃあ俺が説明するぞ」

釣り人のヤスヒロが話しを変えたな。

ピリリッピリリ！！

「オーキド博士からメールだわ」

クリスタルがポケギアを見た。

「と、年上ッ!？」

イエローを見てクリスタルが驚く。

まあそりゃあそうなるわな。

「ハッハッハ。お嬢ちゃん、心配しなくてもいいよ。俺達は怪しい者じゃない」

ヤスヒロさんが笑う。

「イエローの事だからどうせキッチンと説明もせずに連れて来たんだろうが、今、この船はジョウト西側の海域をタンバ方面に向かってる。お嬢ちゃんがこの先のルートに考えていると聞いたんで、船を用意しといたんだよ」

ヤスヒロさんがクリスタルに説明する。

「勿論、本当の目的はお嬢ちゃんが追っている伝説の三匹について、俺達が知っている情報を伝える事だ」

「じゃあ、本当の事だったんですね」

「ああ、本当だ。このイエローこそ伝説の三匹を眠りから目覚めさせた張本人さ。いや、もっと正確に言うところ、その瞬間に立ち会ったというべきか……」

確かイエローの麦藁帽子には銀色の羽と虹色の羽があったな。

「元々、俺達がジョウトへ来たのは四天王騒動の時、ジョウト方面へ消えたという大きな鳥ポケモンについて調べるためだった。しかし……………」

ババババッ！！

あ。

「伏せろッ！！テッポウオの大群やッ！！」

テッポウオが現れて、漁船に次々とぶつかっていく。

「ちい、船体にも激突してくるでッ！！」

「しかし、何故だッ！！これでは船を進ませる事が出来んッ！！」

……………なら手は一つや。

「クリスタルッ！！テッポウオを全部捕獲するんやッ！！」

「は、はいッ！！パラぴよんッ！！」

クリスタルがパラセクトを出す。

「パラぴよん、”キノコのほうし”の散布範囲を広げてッ！！三人共、少しの間は息を止めてッ！！」

はいはい。

パフンッ！！

パラセクトから発射された胞子がテッポウオに降り懸かる。

「よしッ!!」

クリスタルがモンスターボールを並べる。

「はッ!!」

クリスタルがモンスターボールを打ち上げる。

ボボボボボンッ!!

大量のテッポウオが次々と捕まっていた。

「……捕獲、完了しました」

「凄い凄いッ!!」

「専門家とは聞いていたがこれ程とはな」

イエローとヤスヒロさんが感心する。

「ボクなんか捕獲が苦手で、野生のポケモンを捕まえた事なんて数えるくらいしかないから……尊敬しますッ!!」

「えッ!?!」

イエローの言葉にクリスタルが驚く。

まあそうなるわな。

「あれ？クリスタルさん、貴女のパラセクト、怪我していますよ」

「ホントッ！！あ、僅かだけど、切り傷が……」

「あれだけの数や。捕獲される間に反撃したヤツもいたんやろな」

「急いで傷薬を……」

クリスタルがリュックから傷薬を探すけど、イエローが癒しの力でパラセクトの傷を治した。

「えッ！？」

「驚く事はない。癒しの力……イエローの持つ特別な才能なんだ」

驚くクリスタルにヤスヒロさんが説明をする。

「うふふ」

「えへ」

「よろしくイエローさん。私の事はクリスと呼んで下さい。あ、シヨウさんもいいです」

「ハイ。分かりました」

「ああ」

「け、敬語はなしですよイエローさん。私が年下なのに……………」

「ハッハッハ」

クリスの慌てぶりにヤスヒロさんが笑う。

「……………そういえば、ポケモンの大移動は……………前にも同じ事があった。去年のふたご島……………」

イエローが何かを思い出す。

「オーキド博士はあの時、野生の生物が大きな危機の前ぶれを察知したからと言っていました。今回もしかして……………」

ゴゴゴゴゴゴッ！！

その時、何か響いた。

「イエローやばいぜッ！！お前のイヤな予感が当たっちゃったッ！！舵が効かんッ！！この船は既に……………」

「既にッ！？」

「あれを見ろッ！！」

漁船は巨大な渦の中にいた。

「きよ、巨大な渦の中にいるッ！！この辺りはうずしおの発生する海域と言われているが、これ程とは聞いた事がないッ！！何とか抜け出さないとッ！！」

「ッ!？」

その時、クリスが何かを見つけた。

「見て、渦の下に……渦の下に何かいますッ!!」

『あれはッ!？』

渦の下には、ジョウトに飛び去ったと思う鳥ポケモンらしいのがいた。

第九話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第十話

ザパアアアッ！！

渦の中にいたポケモンが浮上してきた。

そして、漁船と近くにいた高速船アクア号が浮かんた。

「うわわわッ！！」

「皆、何かに掴まれッ！！」

俺の言葉に皆は何かに掴まる。

「な、何なのこれはッ！？」

「ポケモンの念力やッ！！コイツはルギアやッ！！」

俺がそう言った瞬間、ルギアからエアロブラストが発射された。

ドオオオンッ！！

エアロブラストがうずまき島の岩場に着弾する。

そしてルギアは念力でアクア号と漁船を投げた。

「かなり無茶すんなおいッ!!」

俺は近くにいたクリスを抱く。

「シ、シヨウさんッ!？」

「怪我すんなよッ!!」

ザパアアアンッ!!

漁船が海面に着水する。

着水の衝撃で海水が漁船に降り懸かる。

「イエローッ!! お嬢ちゃんッ!! シヨウッ!! 大丈夫かッ!!」

「あれは……あの姿は……あの時のポケモンだッ!! スオウ島を飛んでた……間違いないッ!!」

「あの時ってッ!？」

「ワタル戦の時ですッ!!^{ジョウト}西の方へ消えたという話だったけど、本当だったんだッ!!」

事情を知らないクリスにイエローが説明する。

ピピピピピッ!!

「貴女のカバンから音が……」

イエローの言葉にクリスがカバンを探る。

「本当だッ!! 私の凶鑑が鳴ってるッ!! でも何で? こんな機能知らないッ!! 故障かしら?」

「もしかして『凶鑑の共鳴音』じゃッ!？」

「共鳴音?」

「ええッ!! 前の凶鑑にはそういう機能があったんですッ!! 『凶鑑が三つ集合し、さらに正しい所有者の手にあるという条件で共鳴音が発せられる』という機能がッ!! スオウ島でもその機能が働いたと後でレッドさんが……」

「エアロブラストが来るでッ!!」

ルギアから発射されたエアロブラストが漁船に着弾した。

バキャンッ!!

漁船が真っ二つに割れて、俺は衝撃で海に飛ばされた。

『ショウさんッ!!』

「ちい、シャワーズッ!!”なみのり”やッ!!」

俺はシャワーズを出して”なみのり”で乗り切る。

「クリスッ!!」

クリスが漁船の船尾に取り残された。

「ん？」

シルバーとゴールドが漁船の船尾に着いたな。

「て、てめえッ！！スズの塔の時に続いてまたいいカッコかッ！？ギヤルを助けるのは俺の役目だぜッ！！手を引っ込めやがれッ！！」

「……………ん？」

クリスが目を覚ましたな。

「きゃあああッ！！不良が二人ッ！！」

「ふ、不良ッ！？コイツはともかく、俺は……………」

ピピピピピピッ！！

「？」

「えッ！？」

三人の図鑑が鳴り出した。

「（この二人が、私以外の新ポケモン図鑑所有者ッ！？）」

……………多分、クリスは驚いてるな。

「大丈夫かッ!？」

俺は漁船に飛び乗る。

「あ、あんたは？」

「俺も凶鑑所有者や」

「えッ!？」

ゴールドが驚く。

「名前はショウや。それよりも来るでッ!！」

ルギアからエアロブラストが来た。

ドンドンドンッ!！」

「邪魔だッ!！」

「何をッ!！」

「(こ、こわい。この二人……………)」

「……………行くぞアリゲイツ」

「おい、待てよシルバー」

ゴールドがシルバーを引き止めた。

「ここで固まったら攻撃対象になりやすいうえ、反撃しにくい事くらい俺にだって分かるぜ。だが、おめーのアリゲイツを見てみな。コイツらは本能的に共闘の構えを取ってるぜッ!!」

「だから何だ？」

「今回ばかりは俺達トレーナーの都合よりも優先してやりてえんだ。コイツらの心持ちをなッ!!」

三匹が一斉に攻撃をするが軌道を変えるのが精一杯やった。

「ちいッ!!三匹がかりでも軌道を変えるのが精一杯かよッ!!」

「なら四匹ならどうや？」

『え?』

「バクフーンッ!!”かえんぐるま”やッ!!」

俺はバクフーンを出して”かえんぐるま”をさせるが、ルギアの右翼を少しだけ傷をつけるくらいしか出来なかった。

「あちゃゝ。まだレベル不足やな」

「す、スゲー……。バクたろうの進化系だ……」

ゴールドが驚く。

「試す前から分かっている」

「んだとオッ!!」

「やめてッ!!」

シルバーとゴールドが一触即発の空気をクリスが止める。

「喧嘩はよくないわッ!! 貴方達、本当にオーキド博士に選ばれたトレーナーなのッ!？」

シルバーは盗んだけどな。

「あ〜ん? いきなり説教か? ギャルかと思えば、さては俺の苦手な超〜マジメ系学級委員タイプ」だなおい?」

「マ、マジメ系って……マジメはいいことでしょッ!!」

「……もう夫婦喧嘩はええか?」

「誰が夫婦喧嘩だ(ですか) ッ!!」

「息ピッタリやん……。ま、それよりルギアを海に引きずり込むで」

「う、海に引きずり込むだとッ!! あのデカブツをかッ!？」

「ああ。それより俺は18や。お前らより年上やからな?」

「マジっすかッ!？」

「本気と書いてマジや。ルギアの攻撃は空気弾……一息の空気弾『エアロブラスト』や。大気が供給されない海中では放てないからな」

その時、ルギアがエアロブラストを撃った。

『うわッ!!』

衝撃でゴールドが海に投げ出された。

第十話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第十一話（前書き）

ルギア捕獲？場面です。

ちなみにこの小説のOPはd o aの英雄です。

ユーチューブにあるポケスペ四章と英雄はマジであっている……。

第十一話

「ゴールドッ!!」

「がばッ!!」

ゴールドは海面に叩きつけられた。

「コイツに掴まれッ!!」

シルバーがロープを投げて、ゴールドがロープを受け取る。

「とつとこつちまで泳いで来いッ!!」

ゴールドを引き上げようとするが、渦の影響でゴールドが離れていく。

「ピジョットッ!! ゴールドを助けるんやッ!!」

俺はピジョットを出して離れていくゴールドの救助に向かわせる。

「ッ!?! アカンッ!!」

ザパアアアーンッ!!

高波がゴールドを襲う。

「ゴールドッ!!」

「余計な手間を……………」

シルバーがぶつくさ言いながらロープを引っ張る。

すると、いきなりロープが切れていた。

「まさかッ!?!」

ゴゴゴゴゴゴッ!!

「な、何だッ!?!」

その時、ゴールドがマンタインと大量のテッポウオで空に上昇する。

「何イツ!?!」

「あれはマンタインや。タイプは水と飛行や」

「海と空の両用ポケモンッ!?!」

マンタインは懐かしいなあ。

マンタインは金にしか出ないはずなのに、何でか知らんが作者が持ってた銀で出たからな。

『マジで事実です。何でか分からないんですけどね。それを証明しようにも、内臓データが切れたしb y作者』

作者の間違いとちゅうか？

『でもマジやと思うねんけどなあb y作者』

「いくぜエエーッ！！」

ゴールドがルギアに向かう。

「回れ右ッ！！」

テッポウオが一斉に前を向く。

「全砲一斉発射ッ！！」

テッポウオが一斉にルギアに対して水を放つ。

「凄いッ！！」

だが、ルギアは頭でマントインを叩き落とした。

「ウワアアアッ！！」

ゴールドとマントインは島に落ちた。

「島に落ちた。失敗だわッ！！」

「いや……違う。見ろッ！！ヤツは別の方法で『空気弾封じ』を実

行したッ!!」

ルギアの口はキューで閉じられなかった。

「口の開け閉めそのものができなくては、あの攻撃は放ちようがないッ!! 勝機があるとすれば今しかないッ!! アリゲイツッ!!」

シルバーがアリゲイツを出す。

「シャワーズッ!!」

俺もシャワーズを出して漁船の船尾を砂浜につけた。

「大丈夫かゴールドッ!!」

「ああショウさん。どうすか俺の天才的作戦は……。水流浴びせて怯んだスキを狙いましたよ」

「ああ、よく頑張ったな」

ゴオオオオッ!!

「来るぞッ!!」

ルギアが俺達を踏み潰そうとする。

「バクフーンッ!!」

危な……。踏まれそうやったけどバクフーンを出して何とか助かった。

ゴールド達も無事やな。

「踏ん張れよバクフーンッ!!」

その時、三匹が進化した。

『三匹同時に最終形態になったッ!?!』

「信じられないッ!! この前ベイリーフに進化したばかりなのに…
…どうしてッ!!」

「理屈なんてどーでもいいぜッ!! 押し負けてねえッ!! 今ならこのデカブツに勝てるぜッ!!」

「ならルギアの体力を削るでッ!! シャワーズ、”あまごい”やッ
!!」

シャワーズが雨を降らせる。

「一体何を……」

「お前らは避難しろッ!! その後にポケモンを回収するんやッ!!」

「分かりましたッ!!」

ゴールドとクリスが一旦離れる。

シルバーも洩々離れる。

「ピジョット、ピカチュウをおんぶしてルギアの上やッ!! バタフリー、”ねむりごな”やッ!!」

ピカチュウを背負ったピジョットがルギアの上空に行き、バタフリーが”ねむりごな”でルギアを眠らせる。

三人共、ポケモンは回収したな。

「ルギアの身体は水に濡れている。水を通しやすいのはッ!？」

「…………電気…………」

俺の意図に気づいたシルバーが呟く。

「行けエエエピカチュウッ!!”かみなり”やッ!!」

「ピイイカッチュウウウーッ!!」

”かみなり”がルギアに直撃した。

「ハッハッハ。効果は抜群やッ!! 今や、ボールを投げろッ!!」

「了解ですシヨウさんッ!! シルバー、当てどころは何処だッ!!」

「額だッ!! 額を狙えッ!!」

「うおっしやあッ!! いっけえッ!!」

バシッ!!

ゴールドがモンスターボールを投げるが違う場所に当たって跳ね返った。

「しまったッ！！何時もみたいにキューで打ってねえから外しちまったッ！！」

「任せてッ！！たあアッ！！」

クリスが蹴った。

ボムンッ！！

今度こそ、ルギアに当たった。

キューが地面に突き刺さり、その近くにモンスターボールがある。

「……やった。オイやるじゃねーか学級委員ッ！！よくぞ俺の作ったチャンスを生かしてモノにしたなッ！！」

「……シヨウさんが殆どしたじゃない……」

クリスがそう呟く。

シルバーはモンスターボールを拾いあげるが何も言わない。

「オイ、どーしたよ？あ~~~~ん？」

「……見てみろ」

ボールを見るがルギアはいなかった。

「……んなッ!？」

「えええッ!!」

「中身がねえッ!?! 空だとオッ!!」

ゴールの絶叫が響いた。

第十一話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第十二話

「何で空なんだッ！！ボールはヤツの額に当たって姿が消えたぞッ！！」

「ボールに納まったようにしか見えなかったのにッ！！」

ゴールドとクリスが驚く。

「ルギアのパワーを考えれば、当たり前かもしれない。あのキューで『空気弾封じ』が出来るのも、僅かの時間だろうと思っていた」

「追い詰めたと思っていたのは俺達だけで、ヤツはまだ力を残してたってことかッ！！」

「俺のピカチュウの”かみなり”もルギアレベルまで足りてなかったんやろな……」

「ということは……ボールが当たった時に発せられた光……あの光幕に紛れて逃げ出した？」

「……クリス。凶鑑の追尾システムで調べてみるんや」

「追尾っすか？」

「そうよ。一度でも出会ったポケモンなら、例え取り逃がしてもその行方を追う事が出来る新ポケモン図鑑の機能、追尾システムよ。貴方達も知ってるでしょ？」

「「……………（知らなかった…………）」」

「…………お前ら知らなかったやろ？」

「「……………（冷や汗）」」

「…………クリス、ゴールドに教えてやれや」

「は、はい」

クリスがゴールドに教える。

「それにしても、さっきのボールを蹴り上げて見事命中させたコントロールといい、図鑑の機能に詳しい事といい、てめー、ただのガチガチカタブツ学級委員じゃねーな？」

「ガチガチってまた…………。私はクリス。オーキド博士に全ポケモンのデータ収集を依頼された『捕獲の専門家』ゲットのスペシャリストよッ！！」

「何だよ、ずっと検索中じゃねーかッ！！直ぐには出ねーのか？」

「…………聞いてない…………」

「人の話を聞かんかいッ！！」

ドカッ！！

「あたッ!!」

全く…………。

「おい、シルバーッ!!」

シルバーが洞穴の中に入る。

「シルバー、追尾にはもちっと時間がかかるらしいぜ。てめーも手伝いな」

……………そういや漫画にもこんなあったな。

「この穴は……大型ポケモンの足跡やしっぽの跡だわッ!!」

「……………多分、此処はルギアの住家やろな…………」

「本当っすかッ!?!」

「このうずまき列島は四つの小島から成り立っていて、それらは洞窟によって地下で繋がっている……と聞いた事があるわ。確かに此処ならあのポケモンが住家にしてもおかしくないわ」

「それにとろどころに暴れた形跡や血痕がある」

シルバーが血痕を指差す。

「じゃあ、あのデカブツは俺らに出会う前に此処で何者かに攻撃されたってーのかッ!?!」

「そう考えれば納得がいく……………」

「あの我を失った暴れ方。あれは住家と自身を攻撃されたことへの怒りだ」

ん？ あれは……………。

「野生のシエルダーやな……………」

「怪我をしてるわッ！！ 多分あのポケモンの攻撃でだわ」

俺はシエルダーを拾い上げて、リュックからいい傷薬を出した。

「ほら、大丈夫か？」

シエルダーの顔色が良くなり、シエルダーが笑う。

「よしよし。ほら、ピカチュウと遊んどき」

ピカチュウを出して、シエルダーと遊んでる。

ビビーーーーッ！！

その時、凶鑑が鳴った。

「エラーッ！？ 追尾不能なのッ！？」

「なんだ故障か？」

「違うわッ!! ちょっと貸してッ!!」

クリスが四つの図鑑を見せる。

「ほらッ!! 四つ同時に、しかも同じ機能が故障だなんて有り得ないわッ!!」

「故障はしとらん。なら………」

「もう誰かが捕獲したってーのか………」

俺の言葉にゴールドがそう結論を出した。

「俺達以外にも何処からかボールを放ったトレーナーがいて、そっちの方が一瞬早くルギアの額を捕えた」

シルバーはそう言ってヤミカラスを出した。

「ちょ、ちよっと何処へ行くのッ!!」

「俺の勘が正しければそれは恐らくこの住家を襲った攻撃者でもある。全ては仕組まれていたッ!!」

「まさか貴方一人でその攻撃者を探すつもりッ!? まずはオーキド博士やウツギ博士に相談しましょうッ!!」

「おいおい学級委員ギャル。アイツにオーキドのじーさんやウツギ博士と連絡を取れなんてこたあムリな話よ」

「どうしてッ!?!」

「ム、ムリなもんはムリなんだよッ!! 雰囲気で察しなッ!!」

苦しい言い訳やなゴールド。

「貴方はいいのッ!? 彼を一人で行かせてッ!?」

「……………ああ、別にいいぜ。ちょっと前までなら俺も言っただろうさ。オイ、また一人で行くのかよッ!! ってな。だが、今はそうは思わねえ。アイツと俺は同じ敵を追ってる。だから例え別々に動いていようと、その敵に行き着く時にゃ絶対また顔を合わせる。そう思っただけだよ」

「同じ……………敵?」

シルバーは無言のまま島から去った。

第十二話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第十三話（前書き）

抜けてました（汗）

第十三話

「さて、俺らも行くか……」

「そうですね………ってそうだッ!!」

「あッ!!」

「何やねん二人とも？」

いきなり叫ぶなよ。

「イエローさん無事かしらッ!？」

「釣り人のオッサン無事かッ!？」

「……………そーういやあの二人を忘れてたな（汗）」

ポロロロロッ!!

その時、クリスのポケギアが鳴った。

「きつとあの二人から何処かに流れ着いたって知らせだわ」

クリスがボタンを押した。

『もしもしオーキドじゃがッ!!』

「は、博士えッ!？」

『な、なんじゃッ!？何驚いとるッ!？』

まあ流石に博士も、んな声を出したら驚くわな。

『君達がいるタンバ近海に異常気象が発生したと聞いたもんじゃから慌てて電話をしたんじゃが……』

「た、大変だったんですよ博士ッ!! 大きなポケモンに襲われて、荒波に飲まれるしイエローさんとは逸れてしまっ……」

『ク、クリス君落ち着くんじゃッ!! イエローと逸れたじゃとッ!』

いや両方落ち着けや。

『むむ……。ああ見えてもイエローは危険には慣れっこじゃからそんなに心配はないと思うが……。分かった。こちらからも気象調査隊が行く事になったから合わせて救助を依頼しておこう』

既にどざえもんやったらどうすんのやろか……。

『その事とは別に君には新しい頼みがあるんじゃ。今から言う場所に向かってほしいんじゃ』

「向かってほしい場所ですか？何処ですか？」

『セキエイ高原じゃ』

「ポケモンリーグが開催される場所やな」

『おおショウ君。その通りじゃよ。これには君達二人の他にもう一人、ゴールドという図鑑所有者にも同じ事を頼もうと思ってるんじゃないが………』

クリスが思わずゴールドを見る。

『アイツは何処にいるのか……いつも連絡がつかんからどうしたものか………』

「あの……博士。セキエイに行って何をするかはともかく、その彼なら多分……」

『ん？何じゃ？』

「今、私の横にいます………」

「よッ！！オーキドの爺さんッ！！」

『な、何じゃとッ！？』

まあそうなるわな。

『お、お主は一体何をしてたんじゃッ！！』

「まあこっちも色々あったんだよオーキドの爺さん」

「ゴールドッ！！博士に何て事を言うのッ！！」

『あゝ、それは言いんじゃないよクリス君。もう馴れたからの。まあゴールドが無事でよかったわい』

「それじゃあ博士。俺らはセキエイ高原に行けばいいんですね？」

『ああそうじゃ。詳細は追って連絡するわい』

そして博士との電話をクリスが切る。

「それじゃあセキエイ高原に行くか。ピカチュウ、行くで」

シエルダーと遊んでいたピカチュウが来るけど、シエルダーも来た。

「ん？どうしたんや？」

シエルダーは何かを訴えるようにしている。

「もしかして……俺と一緒に行きたいとか？」

シエルダーはその言葉に頷いた。

「まあええか。……ゲンガー、悪いけどシエルダーと交代になるけどええか？」

モンスターボール内にいたゲンガーが頷いた。

「なら、私が持っている携帯転送システムで博士の所に送りますよ」

「ああええわ。ワカバに寄って母さんに預けるから」

俺はシェルダーにモンスターボールを投げた。

シェルダーは大人しく捕まった。

「さて、行くか。ピジョット」

俺はピジョットの背中に乗る。

「先に行つとくわ。合流場所はワカバで合流するか。ゴールドとクリスはまあ海上デートしてから来いや」

「「何でそうなるんすか（ですか）ッ!!」」

「いやああお似合いやと思うけどなあ」

とりあえず、ゴールド達と分かれて、先にワカバタウンに向かった。

——ワカバタウン——

「只今あゝ」

「あら？お帰り。どうしたん？」

メシの準備をしてたんか、エプロン姿の母さんが出てきた。

「ちょっと寄れたから帰ってきたんや。まあまたセキエイ高原に行かなあかんけどな」

「セキエイ高原？ ポケモンリーグにでも参加するの？」

「ちやうちやう。この世界はポケスペやからセキエイ高原に行かなあかんねん」

「あ、ポケスペの世界なん？」

母さんも何故かポケスペは見ていたから知ってるな。

「それと、手持ちが七匹になったから母さんに預けにきたんや。はいゲンガー」

ボールからゲンガーを出した。

「……いきなり”したでなめる”とかしないわよね？」

「せえへんて」

ゲンガーも頷いとるし。

「まあいいわ。よろしくねゲンガー」

母さんからの握手にゲンガーも答える。

「じゃあちよっくら行ってくるわ」

「あら、もう行くの？」

「ああ。主人公達とセキエイ高原に行かなあかんからな」

「そう。気をつけてね」

「うん。行ってくるわ」

俺は家を出た。

第十三話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第十四話（前書き）

ファイヤーレッドクリアしたらジョウトの三匹が出てくるのは知らなかった……。

自分はフシギダネを選んだからエンテイ……。

第十四話

――23番道路――

前作のゲームやったらセキエイ高原のBGMが必ず流れるけど、金銀は忘れたな。

「まだ着かねーのかよお。いい加減遠いぜ。あゝゝゝ、ハラ減ってきたなゝゝゝ」

ゴールドがバクフーンの背中に乗りながらそんな事を言う。

隣にはクリスがメガニウムの背中に乗っている。

俺はピジョットの背中に乗りながら飛行している。

「そうだ。途中で買ってきたタンバ名物「ホカホカ焼き芋」でも食うか」

ゴールドがリュックから焼き芋を三個出した。

「どうぞっすショウ先輩」

「おう」

ゴールドは何故か俺を先輩と言ってきた。

ゴールド曰く「先輩は先輩っすよ」らしい。

「ほらよクリス、一本やるぜ。デブらない程度に控えめに食いな」

「な………」

クリスがゴールドの言葉に驚く。

「女の子に普通、そうゆう事言う？それにこれ、よく焼けてないじゃないッ!!」

やっぱ女の子なんやろか、食う気満々やん。

「んだよ、そんな事か。バクたろう」

ボウウッ!!

バクたろうが炎を出した。

「ハハハッ!! 軽くあぶり直してやろーと思ったんだけど、ちょっと火加減が強すぎたか。まあよくある事だ。気にすんなクリス」

「……………気にするなですってエエエ……。火傷するかと思ったじゃないゴールドッ!!」

クリスが焦げた焼き芋をゴールドに投げた。

あ、命中した。

「…………イチャイチャ臭やなあ…………」

「「だから違うッ!!」」

「息もあつとるやん……………」

俺は溜め息を吐いた。

「大体貴方は……………」

「うわったったったッ!! 悪かったってッ!! ったくしつけーなッ
!!」

あれからずっとクリスがゴールドに文句を言っている。

「よっぽど焼き芋を焦がされたのを根に持ってるな……………」

「そうですよ。焼き芋は美味しくて……………って違いますよッ!!」

あら? ちゃうんか?

「お、セキエイ高原のポケモンリーグの会場が見えたで」

俺達はリーグ会場に着いた。

「何だよこの人だからよ」

「リーグの挑戦者に決まってるやんか」

「一般入場受付だの選手入場口だのややこしいぜ。よしッ!!」

ゴールドがキックボードを出した。

「先に行くぜッ!!」

「あッ!!」

ゴールドはバクたろうを戻して中に突撃した。

「どけえーッ!! 一般人どもッ!!」

「あ、こらッ!!」

入場受付係の人が叫んだ。

「ちょっとゴールドッ!!」

「あー、さっきの少年と知り合いかね？」

「わわわ、す、すみませんッ!!」

走ってクリスを受付係が止める。

「えーと、一般入場です。あ、入場料は彼の分も私が払いますから
……」

全く……………。

「きゃあアアッ!!」

「何や？」

「……………またゴールドが何かしでかしたんじゃないあ……………」

……………クリス怖いから。

「あゝヤンヤンマが暴れてるな……………」

「どうしたッ!？」

「登録手続きのために一旦、出場選手から預かっていたボールが弾みで開いたんだ。それで赤ん坊を持って……………」

確かに三匹のうちの一匹が赤ちゃんを持つとるな。

「駄目だ。素早くて捕まえられないッ!!」

「あのヤンヤンマ達のトレーナーを呼ぶんだッ!!」

辺りが騒然としてきた。

「俺に任せろッ!!」

ゴールドがキューとボールを出す。

「そらッ!!」

そして、ボールを打った。

「赤ん坊が巻き込まれているのに攻撃をするなんて……何て事をするんだッ!!」

「攻撃じゃねーよッ!! パープリンは黙ってみてなッ!!」

「ん？」

ボールは右横の壁に当たり、真上に当たり、左横の壁に当たる。

それが何回も繰り返していると、ヤンヤンマが眼を回して赤ちゃんを離れた。

「きゃあアアッ!!」

ボムッ!!

その直後、ボールの開閉スイッチに床が当たって、ウソツキーが赤ちゃんをキャッチした。

『オオオオオッ!!』

見物人が歓声をあげた。

「へへ。ヤンヤンマはでっかい眼で常に360度を見てるポケモンだ。まあその特徴を逆に利用してやったまで……イテテテッ!!」

ゴールドがクリスに耳を引っ張られる。

「ってーなッ！！何だよッ！！」

「バカッ！！助けるにしても、もっと地味にやってッ！！何しに来たか忘れたの？目立ったら駄目なのッ！！」

怒っとなる怒っとなる。

ピポッ！！

「あ、博士。はい。無事に会場入りしました。はい、くれぐれも目立たないようにします。ゴールドにもちゃんと言います」

「わーってるよ。さっさと行こうぜ」

ゴールドがクリスに言う。

「どっちだ？エキシビジョンマッチをやるメイン闘技場は？」

「あっちやな」

「なら早く行きましょう、ショウ先輩」

「分かった分かった」

俺達は闘技場に向かった。

第十四話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第十五話

「此処がメイン闘技場やな……」

俺達が着くと、ジムリーダー戦の組み合わせが終わってもうすぐ始まろうとしていた。

「あれがカントーとジョウトの各町を代表する実力者達十六人やな」

「……………そして……あの中の一人が仮面野郎か……」

『第一試合。ニビジムタケシさん対アサギジムミカンさんの試合を始めますッ！！試合開始ッ！！』

コガネラジオのクルミが実況をしているな。

それにしても、タケシはちょっとアニメとちゃうな。

お姉さん好きとちゃうみたいやし。

「カブトプス対デンリユウか……………」

てか、デンリユウはアサギの灯台を守ってなくてええんやろか……。

「カブトプス、” げんしのちから” ツ!!」

カブトプスの” げんしのちから” がデンリュウに直撃した。

「中々の威力やな」

「あの、ショウさん。バトルを見てないで敵を探しましょう」

クリスがそうやってきた。

「敵はジムリーダーやねんからバトルを見ても大丈夫やと思うねんけどなあ……」

あ、ミカンがハガネールを出した。対してタケシはイワークを出したな。

『攻撃する側のイワークが逆にダメージを負っていますッ!! 何という程の防御力なんでしょうッ!!』「鉄壁ガートの女の子」という異名の由来が今、明かされましたッ!!』

あ、ハガネールを隠していた岩が剥がれてきたな。

「” かみくだく” ツ!!」

ハガネールに噛みつかれたイワークが戦闘不能になった。

『イワーク、戦闘不能ッ!! 試合終了ですッ!! 意外な決着ッ!! 勝者は何とミカンさんですッ!! 信じられませんかッ!!』

んな事言うたんなよ。

ザワザワザワッ!!

『ええと、初めて目にする新種のポケモンに場内が騒然としていますが、今、ポケモンの権威であるオーキド博士と繋がっていますので見解を発表していただきましょう』

『オホン。オーキドです』

あ、博士がパネルに映し出された。

『学会にも発表されていないこの種。新ポケモン図鑑のデータ収集のためにジョウトに派遣したトレーナーの少女がたまたま最近捕獲に成功してその存在が初めて確認されました』

「お？クリスの事じゃねーか？」

「多分そうね」

ゴールドとクリスが話している。

『そして、仮につけた名はハガネール。既に馴染みのあるエアームト、コイル、レアコイルなども含めて、新たに「鋼タイプ」として学会にも提案しようと、現在資料をまとめております』

博士の説明が終わったな。

『オーキド博士、ありがとうございます。これでジョウトは一勝目となりました』

「どうだクリス？今のところ怪しそうなヤツはいたか？」

「まだ分からないわ」

「そりゃあそうやろな。こんなに人が多けれりゃあ」

「でも信じられないわ。あのジムリーダー達の中に、全国に散り散りになったロケット団の残党を集めた親玉がいるなんて…………（ロケット団。三年前に解散したポケモンを使って悪事の限りを尽くす秘密結社が今また…………）」

「信じられようと信じられまいと、現実には現実だぜクリス。オーキドの爺さんの言葉を思い出してみろよ」

———回想———

「ポケモンリーグ会場にクリスとシヨウ先輩と一緒に行けだッてッ！？」

「どういう事ですか？」

『うむ。そこにいる悪の親玉を見つけ出してほしいんじゃ。ロケット団残党を集め、再び組織しようとしている新首領をな』

「なッ!？」

ゴールドが驚く。

『その人物は普段は仮面で顔を隠していて正体は不明。だがその仮面の下は全ジムリーダーの誰かだと判明しとるッ!!』

「ジムリーダーッ!? その中に新首領がいるんですかッ!?!」

『本当じゃ。以前、ゴールドが戦った時にその人物の物と思われるジムバッジの金属粉が検出されたんじゃ。それも一般トレーナーに配られる簡易版ではなく純正のジムリーダー用のがな。この事を知っているのは僕とウツギ君とウツギ君の助手、ポケモン協会の理事、そして君達だけじゃ。ポケモン協会は独自の調査を進めていたが、決定的な証拠を掴むために今回のポケモンをに全ジムリーダーを集める事にしたのじゃ』

「……ってことは……」

『表向きはリーグ開催オープニングセレモニーの出し物として全ジムリーダーによる対抗戦を行うという事になっておるが、本当は……』

「そのジムリーダーを見つけだす事か……」

『その通りじゃ。そこで君達三人はリーグ会場に入り、全てのジムリーダーの行動に目を光らせてくれッ!!』

「おっしやアッ!! 任せとけッ!!」

「あ、あの、私は何をすれば……」

『ゴールドのお目付け役を頼む。アイツが熱くなりすぎて暴走した

ら止められそうなのは君しか考えられん……」

「……えー？」

「仮面野郎め。俺がその正体を必ず暴くッ!!」

心配するクリスを横目にゴールドがなんか燃えている。

——回想終了——

「行くぜエーたろうッ!! バクたろうッ!!」

「もオ~~~~。目立っちゃダメだって言われてんのにッ!!」

「……………はあ、駄目だこりゃあ……」

ゴールドの行動に怒るクリスと共に俺はゴールドを追い掛けた。

第十五話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第十六話（前書き）

イベントフラグです。何か強引かも……。。

第十六話

『ミルタンク戦闘不能ッ！！コガネジム・アカネちゃん対ハナダジム・カスミさんの第二試合はカスミさんの勝利ですッ！！』

ミルタンクのころがるは今だにトラウマやでほんまに……。

「へえ、ポケモンリーグか。初めて来たけど全く派手なイベントだぜ。ジムリーダーの方々も中々きらびやかじゃねーか」

「ゴールド、茶化さないで」

「馬鹿野郎クリス。茶化してなんかいねーよ。ただな……こんなポケモン好き達のお祭りも悪党どもを野放しにしてたらいずれは出来なくなっちまうだろうって考えただけだ。相手はポケモンを使って悪事の限りを尽くす奴らだぜ。俺はそれが許せねえッ！！」

「ゴールド……」

「ゴールドはこんなにかっこよかったか？」

「ひでーっすよショウ先輩。俺はいつでもカッコイイすよ」

「はいはい……」

ゴールドの言葉にクリスが苦笑する。

『第三試合はキキョウジム・ハヤトさん対セキチクジムのアンズさんです。試合開始ッ!!』

お、アンズか、久々やな。

漫画通り負けるんやろか……。

まあ、結果的に言えばアンズが途中棄権をした。

客席の方向に走って行ったから多分、キョウでも見つけたんやと思っけど見失ったなあやあ。

『それでは第四試合、エンジュジム・マツバさん対クチバジム・マチスさんです。試合開始ッ!!』

マチスとマツバの試合が始まる。

……少し見回るか。

「クリス、俺は少し辺りを見回ってくるからゴールドを頼むな」

「あ、はい。分かりました」

さて、クリスの許可も得たし、少し見回るか。

「まあ怪しい奴はおらんな……………」

てかロケット団の服装やったら直ぐに分かるしな。

「何が怪しい奴だ？」

「ウオツ!？」

う、後ろを振り返るとナツメがいた。

「確かコガネのラジオ塔の時に会ったな」

「あ、ああ。名前はショウや。ヤマブキジムのナツメさん」

「普通に話せ。何か気持ち悪い」

いやそう言われてもさ…………。

「んじゃあ普通に話させてもらうわ」

「ああ。ところで、何故此处にいる？此处は関係者以外立入禁止だぞ？」

「あ、マジ？そんな看板とかはなかったんけど……………」

ほんまはあってんけど、隙について入った。

「フフ、怪しい奴はロケット団かな？」

「さあてねえ……………」

「私を探ろうとしても無駄だ。私は最近までシロガネ山にいたからな」

「別にあんたを疑ってないで。元ロケット団の三幹部のナツメ？」

「ほう……………」

ナツメがニヤリと笑う。

「そこまで知っているのか。なら、ポケモン協会には言わないのか？」

「今更それを言ってどないすんの？ ジムリーダー辞めて俺の嫁さんにでもなるか？」

「ウフフフフ。中々面白い事を言うな」

……………わりと本気で言ったんやけどなあ。

「そろそろ時間だ。中々楽しい時間だったよ」

「次会う時はせめて胸をもう少し大きくしといてな」

「なッ!？」

「ハッハッハー……ッ!!」

ナツメが顔を真っ赤にしているうちに俺は走って逃げた。

「……はぁ……はぁ……此処まで来たら大丈夫やろ……」

ロケット団とか怪しい奴はおらんかったし、帰るか。

「ん？」

廊下にブラッキーがうろうろとしてた。

「トレーナーがおらん……」

俺はブラッキーに近づく。

「どないしたんやブラッキー？主人と逸れたんか？」

俺はブラッキーの頭を撫でると、ブラッキーは嬉しそうに尻尾を振った。

「あ、そうや。お前の仲間を紹介したるわ」

俺はシャワーズを出す。

二匹は嬉しそうにじゃれあっている。

「ブラッキー？何処？」

ん？トレーナーやな。

「あ、ブラッキー。此処にいたんだ。探したんだよ」

……ブラッキーの親は全身タイツの上に胴衣を着用している少女やったけど、コイツって確か……。

「あ、ブラッキーを見つけてくれてありがとうございます」

「あ、ああ。廊下でうろうろしてたから、主人が見つかるまでおうとしてたけどな」

「本当にありがとうございます。あ、私の名前はコゴミと言います」

……確かエメラルド編のフロンティアブレインの一人やったな。

「俺はショウ。もうブラッキーと逸れたりしたらあかんぞ？」

「ウィーッスッ！！ありがとうございます」

コゴミはそう言って去った。

「……俺も戻るか。てか、何でコゴミがおったんやろ？」

俺はそう呟きつつ、ゴールド達の元へ戻った。

第十六話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7844x/>

ポケスペの世界へ

2011年11月4日10時25分発行